

# 女優

自殺か？他殺か？

春日信彦

## バイト

田柴の一室で稽古を終えた二人は、スーパーからちようだいした求人情報誌をめくっていた。「先輩、やばいっすよ、授業料どうします。留年になるとは、ついてないっすね。やっぱ、漫才の素質がないんですかね。あんな、しらけた漫才じゃ、もう、あきらめる以外ないですかね」崎山は、肩を落としてぼやいていた。11月の学園祭で行われた卒業漫才が不評で、田森教授から予想もしていなかった落第を宣告されていた。

田柴は、崎山より一才年上であったが、漫才のコンビを組むために、あえて、一年遅らせて崎山と一緒に中洲芸能大学演芸学部漫才学科に入学していた。11月に行われる卒業漫才で好評だと、田森教授の推薦で東京の芸能プロダクションに就職できるため、落第しても退学せず、留年するものが多かった。この大学は二年制だが、ほとんどの学生は自主的に留年する学生が多かった。長いものは、10年も籍を置いているものもいた。

二人は、バイトで学費を払っていたが、もう一年学費を払う羽目になり、頭を抱えていた。毎日、日当のいいバイトはないか、必死に求人雑誌に目を通していた。崎山が、ページのすみに目を止めた。「これって、すごいっすよ。日当3万円、勤務時間；18時から23時。夜食つき、寮有り。作業内容；食肉の解体。条件：友達と同時入社」崎山は、読み上げながら、そこの広告を食い入るように見入っていた。

聞き入っていた田柴は、顎に手をやり、首をかしげていた。「5時間で3万か？それって、やばい仕事とちゃうんか？なんと言う会社だ」田柴は、腕組みをすると、崎山の顔をのぞき見た。「え〜と、会社は、デリシャス食肉販売株式会社らしい〜す」読み上げると、田柴の顔をうかがった。「食肉の解体の仕事か？へ〜」崎山は、やる気満々の顔で雑誌を田柴の顔の前に差し出した。

田柴は、雑誌を手に取りしばらく考え込んだ。大きくため息をつくと話し始めた。「でもな〜、ちょっと、眉唾物だな〜、たったの5時間で、3万円だぞ。変じゃないか？」田柴は、納得のいかない日当に顔をしかめた。「先輩、作業内容が食肉の解体と言うことは、牛の腹を切りさいて、内臓を取り出す仕事じゃないですか？きっとそうですよ」田柴は、大きく頷いたが、それでも納得いかない顔で話し始めた。

「でもな〜、たとえ、はらわたを取り出す仕事にしても、日当がよすぎやしないか？それに、友達と同時入社ってのは、どういうことだ」田柴は、意味不明の文言が気にかかっていた。崎山も頭をかきむしり返事した。「はらわたを取り出す仕事って、気持ち悪いじゃないですか。息があったもの同士じゃないと長続きしないと言うことですよ。先輩、今は、気持ち悪い、とか言ってる場合じゃないっすよ。やりましょう。この条件、二人にぴったりじゃないですか」崎山は、ポンと雑誌を中指ではじき田柴の顔を見つめた。

目を瞑り腕組みをした田柴は、納得がいかない表情で俯いてしまった。「先輩、やりましょう。こんな日当、今時ありませんよ。授業料を払っても、貯金ができますよ。漫才師なんて、最初は売れないわけだし。卒業後のことも考えれば、こんなにいいバイトはないっすよ。先輩、やりましょう。早く、面接にいかないと、他のやつらに取られますよ」崎山は、椅子に腰掛けていた田柴の膝をゆすった。

大きく頷いた田柴は、納得はいかなかったが、とにかく面接を受けてみることにした。「まあ、話を聞いてから、やるかどうか決めるとするか？崎山、電話しろ」崎山は、首に掛けていたスマホをタッチした。すでに募集が打ち切られていないかと恐る恐る小さな声で問いかけた。「求人広告を見てお電話さし上げていますが、まだ、募集されておられますか？」即座に、元気の良い女性の声が返ってきた。「はい、明日、面接におこし願いますか？」

まだ間に合ったとほっとした崎山は、即座に答えた。「はい、明日の何時に伺えばよろしいでしょうか？」田柴は、真剣な顔つきで崎山の対話に聞き入っていた。「はい、承知いたしました。明日の午前10時、大手門ビル2階ですね。よろしく願います」崎山は、何度も頭を下げて媚びるような返事で電話を切った。「先輩、セーフでした。やっと、僕たちにも運が回ってきたみたいです」崎山は、田柴の家に泊まり、明日一緒に面接に行くことにした。

二人が、9時半ごろ大手門ビルの玄関に到着すると、一足先に、面接が終わったと思われる肩をすぼめた薄汚れた作業服姿の二人の中年男性とすれ違った。「先輩、あれって、ライバルとちやいますか？競争率高そうですね」崎山は、両手を合わせて入社できますようにと神様にお願いした。9時50分になると、デリシャス食肉販売（株）バイト面接室と張り紙された部屋のドアを崎山はそっとノックした。中から、明るい声が返ってきた。「はい、どうぞ」二人が中に入っていくと、かわいらしい受付の女性が、カウンターで笑顔を作っていた。

二人は、かしこまってお辞儀をすると、受付が確認の声をかけた。「10時面接の崎山様と田柴様ですね」受付は、透き通った声で二人に問いかけた。「はい」崎山は、直立し、深々とお辞儀した。田柴も慌てて深々とお辞儀した。それを見ていた彼女は、クスッと笑い、声をかけた。「履歴書をお預かりいたします」はっとした二人は内ポケットから履歴書を取り出し、彼女に手渡した。

履歴書を手を持った彼女は、二人を面接室に案内した。二人は、彼女の後に続きカウンター横の部屋に入っていった。面接室には、50歳前後の白髪の男性が腰掛けていた。彼女は、入り口で待っていたメガネをかけた30歳前後の男性に履歴書を手渡し、甘い香りを残して部屋を出て行った。メガネの男性は、笑顔を作り、手招きした。「どうぞ、おかけください」二人は、長テーブルに並んで腰掛けた。二人の前に腰掛けている人事担当者と思われる白髪の男性にメガネの男性が履歴書を手渡すと、封筒から履歴書を取り出し、写真と顔を確認するように、二人を見つめた。

白髪の男性は、小さな声でやさしく声をかけた。「広告に書いていました通り、仕事内容は、食肉の解体ですが、ホルモンの作業をやっていただくことになります。ただ、今回は、特別に高額の日当をお支払いするのですが、ホルモンと言っても、牛や豚のホルモンではなく、人間のホルモンを担当していただくことになります。この点を了解していただけますか？」二人は、顔を引きつらせ、顔を見合わせた。二人は、何と云っていいか分からず、固まってしまった。

「いかがですか？了解なされますか？」二人は、震えていた。田柴は、崎山の膝をつついた。「はい、人間のホルモンといいますと、人間の内臓を取り出す仕事と言うことですか？」覚悟を決めた崎山は、勇気を振り絞って質問した。「はい、おっしゃるとおり、人間の肝臓、小腸、心臓、眼球、それと、男性の場合はペニスと睾丸、女性の場合は卵巣を摘出していただきます。施術方法は、研修をいたしますので、ご心配なく」白髪男性は、事務的に述べた。

田柴は、膝まで震えだしていた。崎山は、鳥肌が立っていたが、ぜひともやりたいという気持ちが抑えきれず、さらに質問した。「摘出は、工場であればいいのですか？何人ぐらいやれば？」崎山は、お金が欲しくて覚悟を決めていた。「いや、工場ではありません。契約先の病院です。指定された病院に出向き、その日に指定された内臓を摘出していただくだけです。一日に一人です。摘出した内臓をビニール袋につめて、それらを保冷箱に入れて、工場に持ち帰っていただければいいのです。簡単な、作業です。移動には、会社の車を使われてかまいませんが、タクシーを使われてもかまいません」崎山は、あまりにも具体的な話にめまいがしていた。

田柴は、あまりにも不気味な仕事に、ドン引きしていたが、ここまできたからには、やるしかないと覚悟した。ちょっと疑問に思ったことを訊ねた。「施術は、医者の方が、上手じゃないんですか？」崎山も、マジな顔つきで頷いた。「それなんです、確かに医者にやっていただければ、こんな無駄な出費はしなくてすむのですが、医者は、治療目的以外の施術はしないのです。そこで、アルバイトを雇うってわけです」二人は、顔を見合わせて頷いた。

「この作業は、違法ではありませんが、ここでの話は他言されないようにお願いします。亡くなられた方は、臓器提供に同意をなされていますので、医者は移植のために必要な臓器を摘出し、残りの臓器を私たちに提供してくださるのです。法律上、まったく問題はありません。安心して、作業をなさってください」白髪の男性は、ドヤ顔で奇妙な笑顔を作った。崎山は、やる気はあったが、あまりにも気持ち悪い作業をイメージすると、しり込みし始めていた。

しばらくうつむいていた崎山は、さらに質問した。「その仕事は、週何回ぐらいでしょうか？」作り笑顔をした白髪の男性は、即座に答えた。「そうですね、この作業は、病院との連携ですから、週2、3回と言うところですよ。50の契約先病院がありますので、仕事は毎週必ずあります。月収、30万円ぐらいにはなるでしょう。すでに、二組のバイトが決定しています。後一組です、どうなされますか？」二人の心は、ふらついていた。

田柴は、覚悟を決めていたが、次第に怖気づき始めていた。人間の内蔵をイメージすればするほど、全身に震えが走った。田柴は、あまりの不安から言葉が飛び出した。「今、返事しなければなりませんか？1時間ほど二人で相談したいのですが？」田柴は、崎山の青くなった顔を見つめた。崎山も頷き、白髪の男性に懇願する表情をした。「13時に、再度お越しくください。そのときに、はっきりした返事をいただければ結構です」二人は、緊張した肩をすっと落とした。

二人は、大手門ビルの近くのスタバで相談することにした。窓際のカウンター席に腰掛け、人に聞かれないように秘かに話し合うことにした。カウンターに腰掛けると、ビルの玄関ですれ違った二人組みが、すぐ隣に腰掛けていることに田柴は気付いた。崎山に目配せすると、崎山が席を立つかのように、腰を持ち上げた。そのとき、ひげを生やした40歳前後の男が、声をかけた。「さっきの方じゃないですか。お宅たちもあのアルバイトをされるんですか？私たちもなんです。よろしくお願いします」ひげの男性は、赤黒い顔に笑顔を作って挨拶した。

突然の挨拶に崎山は、苦笑いをして腰を落とした。「いや、ま～、なんとというか、その～。今、考慮中なんです。やれるかどうかの」崎山は、バイトの一組であることに気づき、ちょっと気まずくなってしまった。男性は、さらに話を続けた。「そうですよね。あんなバイトする人は、よっぽどお金に困ってなければ、やらないですよ。僕たちは、他にどこも雇ってこない浮浪者ですから、すぐに、引き受けました」薄汚い二人は、何日も洗濯されてないような汚い作業服を着ていた。

崎山たちも同じようにお金に困って、面接にやってきたので、身なりはきれいでも事情は同じであった。「いや、僕たちは、学生なのですが、お金が必要なのです。授業料を払えないと、退学なんです。それで、日当のいいバイトを探しているんです。でも、バイトの内容が、ちょっときついかんと思って、ちょっと、相談する時間をもらったんです」崎山と田柴は、目じりを下げて、ちょこんと頭を下げた。浮浪者風の二人は、頷き、コーヒーをすすった。

コーヒーカップをカウンターの上に置いたひげの男性は、恥ずかしそうに話し始めた。「私たちは、お宅らと違って、社会からドロップアウトしたものです。以前は、原発の仕事をしていたが、原発が停止になって、今、その仕事がないんです。どこも、浮浪者なんか雇ってくれません。浮浪者にとっては、ありがたい仕事でした。たまたま、ゴミ箱で拾った広告雑誌に奇妙なバイトがあったので、面接に行ったところ、幸運にも採用されました。一文無しで、公園で野宿していると言ったところ、ありがたいことに、前借までさせてくれました。人並みにスタバでコーヒーを飲むのは、何年ぶりですかね」ひげの男は、禿の男に振り向いた。

禿の男は、顔は薄汚かったが、ひげの男より若そうだった。禿の男が、頷き目を崎山に向けると、ダミ声で話し始めた。「実のところ、僕はやりたくなかったんです。でも、残飯あさりはもう、こりごりです。寮に入って、人並みの生活ができるのならば、なんでもやろうと決意しました。僕たちには、人間ではできないような仕事しか残っていないのです。運命だとあきらめています」禿の男の目から涙が落ちていた。

田柴と崎山は、あまりにも絶望的な話を聞いて、自分たちがどんなに幸せか実感していた。田柴が、禿の涙顔に向かって話し始めた。「僕たちは、学生なのですが、授業料を払うには、バイトをしなければなりません。他にも、バイトはあるのですが、こんなに日当のいいバイトはそうありません。でも、仕事の内容が、気持ち悪いもので、躊躇しています。贅沢なんですか？」田柴は、話し終わるとコーヒーをすすった。

禿の男は、うらやましそうな顔で二人の顔をちらっと見て、窓の外を頻繁に走っている車をぼんやり眺め話始めた。「おたくらは、未来があっていいじゃないですか。僕たちは、ただ、その日を生きているだけです。僕は、派遣社員として、自動車組み立て工場で働いていました。でも、工場が閉鎖になって、仕事を失ってしまうと、派遣社員には、これと言った仕事はありませんでした。

無一文になり、公園で頭を抱えていたとき、こちらの菅原さんに声を掛けられたのです。原発の仕事は、どんな仕事かわかりませんでしたがお金が欲しくて、ついて行きました。そうですね、7年ほどやったと思います。その仕事も、福島原発事故のため原発は停止され、またもや、失業です。ついていません。このバイトもいつまで続くのやら」禿の男の目は、死んだ魚の目のようにどんより曇っていた。

崎山は、社会から見放された原発労働者の話を聞き、自分たちは、いかに恵まれているかを感じていた。崎山は、やる気でいたが、田柴の気持ちを確認することにした。「先輩、どうします？やりましょうよ、こんなにいいバイトは、他にありませんよ」田柴は、しばらく黙っていた。田柴は、いいにくそうに話し始めた。「確かに、こんなにいいバイトは他にない。それはわかるが、俺は、もともと気が弱いんだ。血を見ただけでも、気分が悪くなる。俺に、できるだろうか？」田柴は、俯いてしまった。

気の毒そうに思った禿の男が、口を挟んだ。「ごもっともです。男のものを切り取るなんて、気持ち悪くてやってられませんよ。僕も、今からでも断りたいぐらいなんです。でも、僕たちには、このような仕事しかないんです。お二人は、他に人間らしい仕事を探されてはどうですか？」田柴は、思わず頷いてしまった。崎山も一瞬、禿の男の話は最もだと納得したが、この不景気に、このような高額の日当がもらえるバイトは他に無いと確信していた。

崎山は、躊躇し始めた。無理にこのバイトを勧めて、二人の仲が悪くなり、漫才までダメになってしまうのではないかと不安になった。崎山は、俯いてしまった田柴にそっと声をかけた。「先輩、このバイト断りましょう。そう、警備のバイトでもやりましょう」田柴は、うつむいたまま、じっと黙っていた。気持ちの整理はつかなかったが、田柴は、やはり、お金が欲しかった。十日やそこら働いて、30万円にもなるバイトは、どこを探しても無いと思った。日当が安いバイトをやれば、それだけバイトの日数が増え、漫才の稽古ができなくなるのではないかと不安になった。

もし、ここで断ってしまえば、他の誰かにすぐに決まってしまうように思えた。田柴は、ゆっくり顔を持ち上げた。「そうだな～、警備のバイトか？そんなバイトで毎月15万円の授業料が払えるのだろうか？漫才の稽古はどうする？性根を入れてやらないと、漫才師の夢は水の泡になってしまう。俺らに残されたチャンスは、あと一年。この一年で、卒業できなければ、もう、コンビは解散だ。崎山、人生をかけて、このバイトやろうじゃないか」田柴は、崎山の右肩をポンと叩いた。

## 悪霊

退学寸前に追い込まれていた田柴と崎山に舞い込んできた幸運のバイトのおかげで、どうにか大学に残ることができた。しかも、奇妙なバイトのおかげで、自殺ネタがバカ受けし、漫才の未来も見えてきた。気持ち悪いバイトで落ち込んだ気持ちを跳ね除けるべく、死体と原発労働者をヒントに自殺をネタとした面白い漫才を崎山は考えだした。崎山は、奇妙なバイトに感謝し、できる限り、このバイトを続けたいと思うようにまでなっていた。

二人は、バイトが無い日であったが、幸運のバイトを決心した大手門のスタバにやって来た。浮浪者と同席したかつてのカウンターに腰掛けた。バイトを始めて4ヶ月がたち、留年一年目を迎えた二人は、漫才師への夢を語り始めた。「先輩、この調子だと、M-1にも出られそうですね。田森教授にも褒められたし、絶対に億万長者になりましょう。それにしても、自殺ネタがあんなにバカ受けするとはな～」崎山は青空を見上げ、目を輝かせコーヒーを飲み干した。

田柴は、最近体調を崩していた。バイトを始めるようになって、下痢や頭痛がするようになっていた。「先輩、最近、顔色が悪いじゃないですか。一度、病院に行かれてはどうですか？先輩が入院でもしたら、漫才もバイトもできなくなりますよ。先輩、どこか具合でも悪いんじゃないですか？」崎山は、田柴の様子が気にかかっていた。田柴は、上の空で崎山の話聞いていた。なぜか、ぼんやりとした不安が襲いかかり、田柴の心は晴れなかった。気分が晴れず、いつも胸がムカムカするような不快感が襲ってくるのだった。食欲も無くなり、好物のカツ丼までもおいしいと思わなくなってしまった。

「いや、よく分からないんだが、最近食欲が無いんだ。心配かけて悪いな。崎山のおかげで漫才も受けるようになってきたって言うのに、俺はだらしないよ。気合がたりないんだな。二人で天下を取ると約束したのにな」崎山は、田柴の強がり心配であった。崎山は、田柴の身体に異変が起きているんじゃないかと憶測していた。バイトを始める前にはあった覇気が、今ではまったくなくなっていたからだ。話し声まで、気迫がなくなっていた。

漫才では、自殺ネタがバカ受けしていたが、田柴の悪霊に取り付かれたような表情が、漫才のリズムを時々狂わせていた。「先輩、そうじゃないっすよ。心配なんです。ヤツパ、どこかおかしいんじゃないかと思うんです。一度、精密検査を受けてください。先輩に万が一のことがあったら、俺は、どうすりゃいいですか？相方は、先輩しかいないっすよ。とにかく、病院に行ってください」田柴は、しばらく何も言えなかった。

田柴は、二人のコーヒーが無くなっていることに気付き、もう一杯飲むことにした。田柴が、二つのコーヒーを運んでくると、静かに崎山の前に置いた。「心配かけてすまん。実を言うと、このバイトを始めてから、体調がおかしくなったような気がする。でも、このバイトをやめるつもりは無い。このバイトのおかげで大学に残れたし、漫才も受けるようになった。このバイトに、本当に感謝している。俺は気が弱いから、死体を見たショックで、体調を崩したに違いないと思う。もうしばらくやっていれば、死体にもなれて、またもとの体調に戻ると思う。俺は、どうしてこんなに気が弱いんだろうな」田柴は、コーヒーを一口弱弱しくすすった。

崎山もコーヒーをすすると笑顔を作った。「そうすか。ガンバっすよ。二人で天下を取りましょう。もし、気分が悪い日は、俺が一人で何でもやりますから、先輩は、横で目を瞑って、休んでください。摘出の要領は、もう完璧です。まかしてください」崎山は、神経が図太いのか、まったく、死体を見ても、臓器の摘出にもまったく動じなかった。ほんの少し笑顔を作った田柴は、小さな声を放った。「すまん。漫才日本一になろう」田柴は、弱弱しいガッツポーズを作った。

二人は、今年に入り、生活費を切り詰めようと、寮での同居を始めていた。同居をするようになり、稽古もやりやすくなり、二人にとっては、好都合であったが、二人が寝ているとき、田柴が真夜中に、突然、大きな叫び声を発するのには困惑していた。目を覚ました崎山は、田柴の様子を窺っては見たが、田柴は、気持ち悪い夢を見たと言うだけであった。稽古をやっているときも、時々、とんちんかんなアドリブを言うようにもなっていた。

「あ、そうそう、二人の自殺志願の漫才、バカ受けでしたね。原発の仕事がなくなり、絶望して自殺の場所を探しに行ったところ、偶然、自殺志願の二人の男がビルの屋上で出くわし、飛び降りたい場所が同じだったが、場所を譲り合い、お先にどうぞ、お先にどうぞと言いつつ、太った男が足を滑らして、ビルから真っ逆さまでやつ。それを笑ったメガネの男も、足を滑らして、真っ逆さま。ところが、ビルの下を歩いていた集団に落下して、偶然助かり、その中の一人が不運にも即死。その命の恩人の顔を見てみると、なんと、今人気の総理だったと言う落ち。バカ受けでしたね」崎山は、田柴を元気付けようと、漫才のネタを笑いながら話した。

この原発労働者の自殺漫才は、田森教授から絶賛され、この漫才は、M-1でも評価されると太鼓判を押されていた。TV九州の人気番組の「旬の漫才師」に二人が大学から推奨を受けていて、彼らは、田森教授からの朗報を待っていた。「先輩、もし、TVに出られたら、一躍人気者ですよ。うまく行けば、東京のTVにも出演できるかもですね。いつごろ、わかるんでしょうね」崎山は、結果を期待し、ワクワクしていた。

田柴はほんの少し笑顔を作り相槌をうったが、気分はブルーで一向に身体のだるさが取れなかった。「俺は、足を引っ張ってないか？せりふはド忘れするし、よくカムし、いったい俺はどうしたことだ。これから、お前とコンビ組めるのか？いやだったら、コンビ解消してもいいんだぞ」田柴は、自分の体調不良と精神的な異変を感じ、崎山にコンビ解消を打診した。目を丸くした崎山は、即座に打ち消した。

「何、言っているんですか。相方は、先輩以外いません。いま、ちょっと、体調が悪いただけじゃありませんか。もう一息です、きっと、道は開けます。田森教授も太鼓判を押してくれたじゃないですか。そうだ、こんなときこそ、桂子さんとデートされたらいいんですよ。うまく行ってるんでしょ」崎山は、落ち込んだときには、彼女に励ましてもらうのが一番と考えた。

崎山は、田柴の身体に異変が起きていることを察知していたが、気を重くさせてはいけないと、話を変えることにした。「先輩、ちょっと疲れているだけです。漫才の稽古をやれば、気分もスカッとしますよ。さっそく、かえって、稽古しましょう」崎山は、席を立とうとほんの少し腰を持ち上げたとき、スマホの着メロが鳴った。田森教授からだった。即座にタッチすると左耳に押し当てた。

ちょっとダミ声の田森教授の弾んだ声がスマホからあふれ出た。「おい、やったぞ、お前たち、TVに出演だ。ディレクターの野北さんが、大いに気に入ってくださり、二人に会いたいそうさ。早速、今週の金曜日にリハーサルをやるそうさ。しっかりやれ」崎山は、嬉しさのあまり、頭が真っ白になっていた。田柴も耳を寄せ田森教授の声を必死に拾っていた。

「おい、崎山、教授は、なんて言っていた。俺たち、TVに出られるんだな」崎山は、涙を流して、喉から絞り出すような声で答えた。「そうです。先輩。やっと、僕たちにも道ができました」崎山は、涙で顔がぐしゃぐしゃになっていた。もはや、声も出なくなっていた。スマホを取り上げた田柴は、田森教授に再確認した。「教授、本当ですね、出演が決まったのですね」即座に返事が返ってきた。

「そうだ、ついにやったな。すぐに、教授室に來い。稽古をつけてやる」田森教授も、嬉しさのあまり、涙声だった。田森教授が二人を留年させたのは、彼らの漫才に期待していたからだった。彼らの漫才を売り込むために、田森教授は野北ディレクターに何度も交渉を重ねていた。ついに、その熱意が伝わり、しかも、今回の自殺ネタが好評で、TV出演が実現した。

崎山は、田柴の言葉から、コンビを解散するのではないかと不安でならなかった。二人は、中学のころからの親友で、そのころから漫才のコンビを組んでいた。崎山は、涙を手で拭きながら、小さな声で話し始めた。「先輩、ついに、僕たちも運が回ってきました。もう、ダメかと何度思ったことか。つらかったです。でも、先輩を信じ、やってきてよかったです。日本一になりましょう。先輩」田柴も涙で顔がぐしゃぐしゃになっていた。

田柴は、何度も頷き、ここで友達になった菅原と宮田にこのことを報告することにした。原発労働者の話を題材にできたのも、この二人のおかげだった。「明日、菅原さんと宮田さんにこのことを報告しよう。あの人たちのおかげでもあるしな」田柴は、崎山の肩を抱き寄せ、つぶやいた。崎山は、ただ、頷くだけだった。スタバを出た二人は、さっそく、教授室に飛んでいった。

稽古を終えた二人の機嫌はよかったが、田柴の顔色は思わしくなかった。崎山は、やはり、田柴の心を癒すことができるのは彼女しかいないと考え、今夜デートするように仕向けた。「先輩、やはり、桂子さんと今夜デートされてはどうですか？きっと、いやな気分も吹っ飛んで、頭もすっきりするんじゃないですか？桂子さんもデートしたいと思っていますよ。メールされてはどうですか？」田柴は、まったく気分が乗らなかったが、TVに出演できる朗報に気分がハイになり、デートの誘いのメールをすることにした。

メールをすると即座にOKのメールが返信されてきた。返信メールを見た崎山は、ほっとして、桂子とのデートに期待した。ところが、夜中の11時過ぎに田柴はなぜか帰ってきた。今夜は、彼女とホテルで一夜を過ごすと思っていた崎山は、さえない顔の田柴を見て不審に思った。「先輩、今夜は、桂子さんとホテルだと思ってましたよ。喧嘩でもしたんですか？」崎山は、黙ってベッドに転がり込んだ田柴に声をかけた。

田柴は、しばらく黙り込んでいたが、ダミ声で突然話し始めた。「俺は、悪霊に取り付かれた。もう、俺はダメだ」田柴は、目を閉じて、身動き一つしなくなった。「先輩、なにがあったんですか？桂子さんとなにがあったんですか？黙ってなくて、打ち明けてください。力になりますから」崎山は、寝転がった田柴の肩をゆすり、返事をせがんだ。田柴は、それでも黙っていた。田柴の目じりから、細い涙がこぼれていた。

ただ事ではないと感じ取った崎山は、田柴を抱えお越し、肩を思いっきり叩いた。「先輩、どうしたって言うんですか。水臭いじゃないですか。何とか言ってください」崎山は、真剣な顔で田柴を見つめた。田柴は、そっと目を開けると、亡霊のよう表情で静かに話し始めた。「俺には、悪霊が取り付いた。桂子さんが、死体に見えてしまった。しばらく桂子さんを見つめていると、お腹が引き裂かれ、内臓が飛び出してきた」田柴は、話し終わると、気絶したように、ベッドに倒れた。

崎山は、すぐに119番で、救急車を呼んだ。病院に担ぎ込まれた田柴は、医者の声かけにもまったく反応しなかった。結局、精神状態が回復するまで、田柴をしばらく入院させることにした。金曜日の「旬の漫才師」のリハーサルは、キャンセルとなり、ビッグチャンスを取り逃がしてしまった。田柴は、3日で退院したものの、漫才がやれる健康状態には回復しなかった。二人は、奇妙なバイトをやめ、田柴を療養させることにした。

崎山は田森教授と相談した結果、大学を休学し、田柴の回復を待つことにした。教授には、新しい相方を勧められたが、きっぱり断った。田柴が、回復しなければ、漫才をやめる決意をしていた。万が一、田柴の精神状態が回復せず、仕事にも就けなくなったら、一生、田柴の面倒を見てやる決意までしていた。田柴は、夜を怖がるようになってしまった。田柴は、気がふれたように話した。「もう、生きていたくない。早く死にたい。崎山、俺と一緒に死んでくれ。頼む」寝る前に、恐怖から、たびたび、頭を抱えて悲鳴をあげるようにもなっていた。

崎山は、責任を感じていた。このように田柴が発狂したのは、自分が奇妙なバイトを勧めたからに違いないと思った。あの時、嫌がっていた田柴の気持ちを汲んで、バイトを断っていたら、このような事態にはならなかったと思った。田柴が寝る前に怯えるようになってからは、崎山は、田柴を抱きしめ励ましていた。今夜もしっかり抱きしめ、田柴を励ましていた。「先輩、きっと、悪霊から守って見せます。しっかりしてください。俺がついています」田柴は、黙って全身を震わせていた。

崎山は、田柴を一生の親友と思っていた。だから、当初は、田柴を養うことに何の疑問も持たなかったが、いざ、看病をする毎日が続くと、自分の将来に不安を感じ始めた。このまま、田柴の精神異常が回復しなければ、いったい自分の人生はどうなるのか？こんな疑問が、たびたび頭をよぎるようになっていた。今は、バイトの貯金があるためどうにか田柴を養っていけるが、貯金が尽きたらいったいどうなるのだろうと不安になった。

田柴は、一向に働く意欲は見せず、毎日、部屋でぼんやりしていた。漫才のネタを話しても、笑いもせず、なにを話しているのだと言う顔で、まったく相槌一つうたなくなっていた。最近では、田柴と漫才ができる将来が見えなくなったことに、苛立ちを感じるようにまでなっていた。崎山には、誰にも相談する人がいなかったため、翌日、今後のことを田森教授に相談することにした。早朝、田柴が目を覚ます前に部屋を出て、警備現場の西区まで原チャリを飛ばした。

田柴を夜一人にしておくとも恐怖のあまり自殺するのではないかと心配で、崎山は、夜のバイトを当分やらないことにしていた。昼間のバイトで探したのが、交通警備のバイトであった。中古の原チャリをレッドバロンで購入し、現場まで直行していた。警備は、運よく3時に終わり、即座に大学に原チャリを飛ばした。5分ほど国道202を走っていると、スマホの着メロが鳴った。急いで原チャリを路肩において、スマホを耳に当てると、女性の声が耳に流れ込んできた。

「はい、崎山です」崎山は、桂子からの電話に驚いた。崎山は、田柴の容態を報告すると、桂子も田柴のことで相談したいことがあるとのことで、会えないかとの連絡だった。崎山は、教授との相談をキャンセルし、急遽桂子と会うことにした。崎山は、例のスタバで落ち合う約束をして、原チャリを追手門に向かって走らせた。スタバに到着すると、4時の約束には、まだ20分ほどあったので、崎山は、コーヒーを飲みながら、桂子の相談内容についてあれこれ考えた。

腕時計を見ると、4時を過ぎていたが、ぼんやりと通りを眺めながら、久しぶりに会う桂子がどんな服装で現れるか楽しみに待っていた。15分を過ぎたころ、黒のプリウスのタクシーが駐車場に停まった。車からピンクのスーツを着た大人びた女性が降りてきた。よく見ていると、彼女は桂子だった。桂子は、田柴と同じ年で、崎山より一才年上であった。桂子は、演劇科で女優を夢見ていたが、田森教授のコネでテレビ九州にアナウンサーとして就職していた。桂子は、在学当時から、教授とのうわさが絶えなかったが、彼女は、出世のためなら、手段は選ばないと言う、豪傑であった。

キョロキョロと店内を見渡している桂子に向かって崎山は、手を振った。カウンターの席までやって来た桂子は、奥のテーブルの席に移ることを提案し、一足先に桂子は、一番奥の席に向かった。崎山は、桂子のコーヒーを注文し、ボーイのようにコーヒーを席まで運んでいった。色っぽい桂子の前に腰掛けると緊張のあまり手が震えてしまった。「お久しぶりです。お元気そうですね」甘い香水に包まれた桂子に崎山は、めまいがしてしまった。学生時代から色気があったが、いっそう色気が増して、女優の雰囲気漂っていた。

崎山は、コーヒーを差し出し、桂子の機嫌をうかがうようにそっと話し出した。「先輩のことで、相談したいと思っていました。一度、入院させては見たのですが、一向に容態がよくなりません。最近、ますます、頭がおかしくなっているようで心配なんです。わけのわからないことばかり口走り、死にたい、自殺したい、俺と一緒に死んでくれ、こんな、わけのわからないことをしゃべるんです。どうすればいいのか・・・」桂子は、黙って聞き入っていた。

二度頷き、崎山を見つめながら桂子は、甘い声で話し始めた。「あの時、俺は、悪霊に取り付かれてしまった。もうダメだ、死にたい、とって、デートの途中で帰られたのです。いったい、なにがあったのかと思って、心配していました。田柴さんに何かあったのですか？」原因は、田柴の結婚の申し込みを断ったことにあったが、そのことを隠し、崎山に問いかけた。崎山は、気まずそうに話し始めた。「すべては、僕が悪いんです。変なバイトをさせたばかりに、あんなことになって。とにかく僕が悪いんです」桂子は、意外な事実を耳にして、ほっとした。

桂子は、変なバイトに興味湧いてきた。「変なバイトって、どんなバイトですか？」桂子は、崎山の顔を覗き込んだ。崎山は、うつむいたまま、話していいものか迷った。仕事の内容は他言しないと言う誓約書にサインしたことを思い出し、話をぼやかすことにした。「いや、ちょっと、説明しにくいのです。バイトのことは、僕たちのことですから、心配しないでください。ところで、桂子さんのお話って何ですか？」突然笑顔を作って、桂子の話に振った。

桂子は、突然振られ、目をパチクリさせたが、田柴とのことを相談することにした。「崎山さんに相談するようなことじゃないと思ったのですが、話を聞いていただけますか？」色っぽい目で見つめられた崎山は、即座に頷いた。「僕でよかったら、なんでもおっしゃってください」桂子は、コーヒーを一気に飲み干した。それを見た崎山は、即座にもう一杯コーヒーを注文しに立ち上がった。

席に戻った崎山は、期待されている自分に有頂天になり、顔を真っ赤にしてコーヒーを差し出した。「私と田柴さんのことなのですが、あの時から、一度も連絡がありません。でも、田柴さんの精神状態が心配なのです。いったい、これからどうすればいいのでしょうか？将来が不安なのです。漫才のほうは、うまくいっていないのですか？」崎山は、漫才のことを聞かれ顔が真っ青になった。

すべては、自分が悪いと考えている崎山は、頭を下げてお詫びした。「申し訳ございません。すべては、僕が悪いんです。先輩にも桂子さんにも、何と言ってお詫びすればいいのか。本当に、僕はバカでした。許してください」崎山は、自分の頭を拳骨で二度叩いた。びっくりした桂子は、大きな声を上げてしまった。「止めて下さい」桂子が叫ぶと、一斉に、周りの客が二人に顔を向けた。

気まずくなった二人は、ひとまずスタバを出ることにした。崎山が、原チャリで来ていることを伝えると、明日の夜、九州TVのスタッフがよく行くしゃぶしゃぶの店で夕食をする約束をした。崎山は、寮に帰ると田柴の様子を窺った。田柴は、相変わらず、自分の趣味に没頭していた。その趣味とは、3Dプリンターで女性のフィギュアを作ることであった。そのほかに、秘かに拳銃を作っていた。

夜勤は、やらないといていたが、明日、急遽桂子と会うことになり、うそをつくことにした。「先輩、やっぱ、夜勤をすることにしました。夜勤のほうが、日当がいいんです。明日は、夜勤だから、そのつもりでいてください」田柴は、突然の夜勤に首を傾げたが、自分が働かないために崎山に苦勞をかけていることに後ろめたさを感じた。「悪いな、夜勤までさせて。俺なんか、さっさと、死ねばいいんだ」一瞬ドキリとした崎山であったが、田柴の体調不良で桂子と会えることになったので、それほどびっくりしなかった。

「先輩、気にしないでください。先輩が、回復するまで、俺に任せてください。元気になったら、また、漫才やりましょう」崎山は、桂子のことをかんぐられないように、愛想笑いをして、田柴の機嫌をとった。翌日の日曜日は、出勤する前に田柴の夕食の準備を済ませ、夜勤と嘘を言って寮を出た。バイクを近くの地下鉄の駐輪場に置くと、タクシーに乗り換え、桂子と待ち合わせのしゃぶしゃぶの店に向かった。

待ち合わせの店は、TV関係者たちが利用する天神にある店で、東京からやってくる芸能人も利用する有名なしゃぶしゃぶの店であった。8時ちょうどにドアを開けると仲居が飛んでやって来た。待ち合わせの件を仲居に話すと、はいと言って、すでに到着していた桂子の小部屋に案内された。小部屋のドアを仲居が開くと、桂子の笑顔があった。すでに注文を聞いていた仲居は、それではお持ちいたしますと言って下がっていった。

高級なこのようなお店には、崎山は入ったことが無かった。バイト生活の崎山には、身分不相応の高級な店であった。「桂子さんは、よくこのような高級なお店にいらっしゃるのですか？」桂子は、この店には、野北ディレクターに誘われて時々来ていた。「そうでもないわ。時々、スタッフとね」桂子は、即座に話を変えることにした。「ここのしゃぶしゃぶは、とってもおいしいのよ。東京からやって来る芸能人もよく来る店なの。結構、有名な店なの」崎山は、ますます、緊張してしまった。

佐賀牛の肉が運ばれてくると、二人は、食事を始めたが、崎山は、何と言って話を切り出していか戸惑っていた。田柴が、精神異常になったのは、すべて自分にあると謝罪したが、桂子は、田柴のことをあまり深刻に考えている様子でなく、食事を楽しんでいる様子で、なんとなく話を切り出しにくかった。桂子が口火を切った。「田柴君、今頃なにやっているんだろ？」崎山は、桂子の何気ない話にほっとした。

「先輩は、3Dプリンターでフィギュアを作ってますよ。発狂しても、自分の趣味は、楽しそうにやっています。でも、ちょっと、困っています・・・」崎山は、銃の話になりそうで、口を閉じた。桂子は、途切れてしまった話に興味を抱いてしまった。「困っているってどんなこと。言いなさいよ、隠すようなことでもないでしょ」桂子は、お箸を置くと色っぽい眼差しを向けた。

崎山は、一瞬迷ったが、個室で誰にも聞かれていないと思い、話すことにした。「誰にも言わないでくださいよ。本当にここだけの話ですよ。実は、先輩、3Dプリンターで拳銃を作っているんです。最近、銃を手にとって、銃口をこめかみに当てて、死のうかな～、なんていうのです。冗談なのか、本気なのか、わかんないんです」桂子は、拳銃と聞いて顔が引きつった。「拳銃」と桂子がささやいたとき、崎山は、シ～と人差し指を口に当てた。

桂子は、とっさに自分の口を両手で押さえた。崎山は、神妙な顔つきで念を押した。「絶対に、内緒です。いいですね」桂子は、ゆっくり頷いた。「田柴君、そこまで、私のことを思っていたのね。私があんなことを言わなければよかったのよ。すべては、私が悪いんだわ。私が、死ぬべきなのよ」桂子は、両手で顔を覆い、泣きはじめた。びっくりした崎山は、いったいなにが起きたのかとおろおろし始めた。

「桂子さん、先輩となにがあつたのですか？打ち明けてください。力になります。桂子さん」崎山は、顔を真っ赤にして訊ねた。しばらく桂子はすすり泣いていたが、小さな声で話し始めた。「とんでもないことを言ってしまったの。好きなのは、崎山君って、本当に馬鹿な私。黙っていればよかったのに」崎山は、自分の耳を疑った。いったい、どういうことだろうと、自問自答した。好きなのは、先輩ではなく、自分のほうだと言うことか？

桂子は、さらに話を続けた。「私も死にたい。田柴君と一緒に死ぬ。崎山君、許して」桂子は、自分の本心を見抜かれないように顔を上げなかった。「なにを言ってるんですか。悪いのは僕です。すべての原因は僕にあるんです。あんなバイトに誘わなければ、先輩が発狂することは無かったんです。すべて、僕が悪いんです。桂子さんは、関係ありません。桂子さんは、勘違いしているのです」崎山は、桂子を必死にかばった。

桂子は、顔を小刻みに振り、話を続けた。「崎山君、ありがとう。でも、決めたの。田柴君と一緒に死にます。神様は、許してくれません。いいんです、もう」桂子は、自殺の決意をほのめかした。崎山は、桂子の本気に目を丸くした。あくまでも、言葉だけと思っていたが、桂子の口調は、本当に自殺する決意を示していた。崎山は、この事態をどのように收拾したらよいのか戸惑ってしまった。

「桂子さん、落ち着いてください。自殺なんて、桂子さんのせいじゃありません。先輩も、もう少し時間がたてば、落ち着くはずです。桂子さん、自殺なんて、馬鹿なことを言わないでください」崎山は、思いつくまま泡を吹きながらしゃべりまくった。桂子は、依然として顔をあげようとしなかった。崎山は、とんでもないことを口走ってしまった。「桂子さんが、自殺するのであれば、俺も、自殺します。すべては、俺の責任です。三人一緒に、自殺しましょう」崎山は、桂子が自殺の思いをとどめるだろうと高をくくっていた。

桂子は、涙顔をゆっくり持ち上げた。「本当なのね、崎山君。一緒に死んでくれるのね。三人で一緒に死ねば、怖くないわ」桂子は、じっと崎山を見つめた。崎山は、さっきの言葉を実行する勇気はなかったが、後には引けず、頷いてしまった。崎山は、見つめ返し、桂子の気持ちが変わるのをじっと待ったが、自殺の決意は変わることが無かった。自殺の気持ちが変わらないうちに、明日の午後2時に、寮に出向くと桂子は言い切った。マジになっている桂子の表情を見つめ、どうか気持ちが変わりますように、と心で何度も崎山は願っては見たが、桂子の表情に変化は無かった。

突然真剣な眼差しになった桂子は、明日の自殺計画の話 시작했다。なぜか、桂子の瞳は輝いていた。「あす、寮の近くまで着たら電話するわ。管理人に見られないように、こっそり、北側の窓から入るわ」午後2時の男子寮は、学生はほとんどいず、管理人も昼寝をしていることが多かった。寮と言っても、こっそり女性が入っても問題はなかったので、窓から入るような面倒なことはせずに、こっそり玄関から入るように言ったところ、玄関の防犯カメラに写りたくない、となぜか言い合った。

## 名演技

さっそく寮に帰った崎山は、思い切って自殺の件を田柴に話した。自殺を思いとどまってくれることを心で願っていたが、桂子と同じように、田柴もマジで自殺を受け入れた。どうしてこんなことになったのかと、何度も自問自答したが、すべては自分が招いたことだと覚悟を決めざるをえなかった。自分が軽はずみなことを言ったことを何度も悔やんだが、もはや後の祭りであった。明日の午後2時に桂子がやってくることを伝えると、頷いた田柴は、押入れの奥から拳銃が入ったボックスを取り出してきた。

翌日、崎山が電話を待っていると、午後1時55分に桂子からの着メロがあった。北側の窓を開けて待っていると、コソドロの様にあたりを見渡しながらか、サングラスにジーンズ姿の桂子が頭をかかめて隣のビルとの隙間1メートルほどの路地を小走りでやって来た。崎山は、用意していた小さな脚立を窓から降ろそうと「ちょっと待って」と言って後ろを振り向いた瞬間、子供のころからバレーをやっていた桂子は、窓に手をかけると、勢いよくジャンプして窓から侵入した。

田柴は、部屋の真ん中で目を閉じ正座していた。ぶかぶかのスニーカーを脱ぎ、サングラスを取った桂子は、そと、田柴の前に正座した。その前には、3丁の3Dプリント拳銃がおかれてあった。後続き、崎山も正座した。三人は、正三角形を作るように正座した。ゆっくり目を開けた田柴は、二人の決意を確認した。「桂子さん、崎山、三人でこの世を去る。決意はいいな」桂子と崎山は、ゆっくり頷いた。田柴は、拳銃を桂子と崎山に手渡すと、なぜか、桂子が話し始めた。

「自分で自分を撃つのは、勇気がいるわ。だから、三人はそれぞれ、憎しみを持って、相手を撃つことにしましょう。田柴さんは、崎山さんを撃つ。崎山さんは、私を撃つ。私は、田柴さんを撃つわ。いい」田柴と崎山は頷いた。田柴は、付け加えた。「それぞれ、左手で銃口を眉間に押し当て、右手で引き金を引け。一発で死ぬる」田柴は、桂子の銃口を左手で眉間に押し当てると、桂子と崎山も同じように銃口を眉間に押し当てた。なぜか、桂子は、シルクの手袋をしていた。

田柴が、崎山に声をかけた。「崎山、お前が、合図しろ。ゴーと声をかけたら、一斉に引き金を引け。いいな」崎山と桂子は、頷いた。崎山は、手が震えていた。突然、「ゴー」と声が響いた。一発目の銃声が鳴り、直後に、二発目の銃声になった。だが、三発目の銃声は、鳴り響かなかった。桂子の前には、眉間に穴が開いた二人の死体が転がっていた。崎山は、桂子を撃つことができなかった。

桂子は、即座に自分の持っていた拳銃を崎山の右手に握らせ、お互いに打ち合ったように見せかけた。崎山が持っていた拳銃は、ハンカチで指紋をきれいにふき取り、拳銃ボックスに戻した。スニーカーを履きサングラスをかけた桂子は、忍者のように窓から飛び降りた。桂子は、すばやく駐輪場に行き、崎山の原チャリのシートボックスに入れていた自分のスニーカーを取り出し履き替えた。そして、ぶかぶかの靴をその中に放り込んだ。あたりを見渡して、誰もいないことを確認した桂子は、サングラスと手袋を外し、玄関に回った。

玄関に入ると、真っ赤な顔の管理人が泡を吹いて、管理人室から飛び出していた。何気ないふりをした桂子は、管理人に声をかけた。「すみません。田柴さんにお会いしたいんですが？」桂子は、管理人に近づき自分の香水をしっかりとかがせた。二発の大きな音にびっくりしていた管理人は、桂子に話しかけた。「いや、今、大きな音がしたんです。田柴さんは、102号です。様子を見に行きますので、案内します」管理人は、大きな音が気になっていたが、とりあえず、来客を102号に案内した。

管理人は、102号のドアの前に立つと、軽くノックした。「田柴さん、お客さんですよ」桂子は、田柴と崎山の知り合いであることを印象付けるために、管理人に声をかけた。「田柴さんは、崎山さんと同居されていますよね。崎山さんは、いらっしゃるのかしら。田柴さんから、そのようにうかがっていますけど」管理人は、ほんの少し苦笑いして、答えた。規則では、同居できないんですが、ちょっとした事情がありまして、同居を許可しています。でも、崎山さんは、きっと、バイトです。警備のバイトをされていましてね。いないと思います」管理人は、もう一度、強くノックした。

桂子は、怪訝な顔で話した。「2時前に崎山さんに電話したら、待っているとのことでした。だから、きっと、いらっしゃるはずです」桂子は、大きな声で崎山の名前を叫んだ。「おかしいですね。約束したのに。変だわ。今まで、約束を破ったことが無いんです。本当に、変だわ」桂子は、ドアを強く3度も叩いた。管理人も、必ず田柴はいると思っているため、不審に思えてきた。

「ご存知かと思いますが、田柴さんは、体調がよくなって、いつも、部屋にこもっていらっしゃるのです。一人で外出するときは、必ず、私に声をかけて、行き先を言われるのです。コンビニに行くときでも、必ず声をかけられるんです。だから、必ず、いるはずなのですが。まったく、おかしいですね」管理人は、困った顔で桂子の色っぽい横顔を見つめた。桂子は、首をかしげ、お願いした。

「管理人さん、合鍵で開けてもらえませんか？ちょっと心配なもので。昨日、崎山さんは、田柴さんのことで相談したいことがあるから、とおっしゃられていました。きっと、部屋にいるはずですが。無理でしょうか？」田柴に自殺願望があるのを知っていた管理人は、少し、不安になってきた。もう一度、ドアを強く叩き、田柴の名前を叫んだ。「田柴さん、お客さんです。開けますよ、いいですか？」管理人は、合鍵を取りに管理人室にかけて行った。戻ってきた管理人は、ドアを開け、そっと中に踏み込んだ。

「田柴さん、お客・・・」管理人は、倒れている二人を見て悲鳴を上げた。「わ～～、ピストル・・・死んでる」管理人は、慌てふためき、桂子の顔を見た。桂子も、死体を見て、両手で顔を覆った。管理人は、手を震わせ、110番をした。桂子は、部屋から飛び出し、警察がやってくるのをじっと待っていた。管理人も、部屋を出て、桂子の様子を見守った。「なんてこった。よりによって、寮で自殺とは・・・」しばらくすると、サイレンを鳴らしたパトカーが二台やって来た。

二人の警察官は、即座に管理人と桂子から聞き取り調査を始めた。一人の若い警官が質問した。「第一発見者は、お二人ですね。発見されて、何かに触られたものはありますか？」二人は、そろって顔を左右に振った。「発見されたときの様子を話していただけませんか？」管理人が、発見の様子を話していると、中年の刑事がやって来た。その若い警官は、刑事に挨拶した。「沢富刑事、こちらが第一発見者です。どうも、自殺のようです」刑事は、若僧をにらみつけ、部屋の中に入っていった。

刑事は、部屋を見渡し、北側の小窓を確認した。鍵は掛かっていなかった。窓の外を眺め、目を下げると、靴跡があった。この窓からの出入りがあったことを刑事は確信した。二人の死体の眉間の弾痕と右手に握り締めたおもちゃのような拳銃を見つめた。一見すると、自殺と判断できたが、小窓の外の靴跡が気になった。靴跡のサイズを記録させることにした。靴跡のサイズは、27センチであった。刑事は、脚立に目をやった。なんに使うつもりだったのだろうと不思議に思った。

若い警官が刑事に声をかけた。「第一発見者の話では、管理人が合鍵でドアを開けたところ、二人の死体があったそうです。怖くなって、すぐに、部屋から飛び出したとっています」刑事は、黙って聞いていた。「二人には、署まで来ていただくように言いなさい」管理人と桂子は、博多署にパトカーで向かった。取調室でそれぞれ個別に事情聴取され、管理人は、ありのままを順序だてて話した。

桂子も、へまなことを言わないように慎重にありのままを話した。刑事は、二人の話に問題は無いと判断した。しかし、窓の下の靴跡と脚立が気になっていた。ドアはしまっていたから、誰かが侵入したとすれば、あの小窓しかなかった。田柴に自殺願望があったことを聞かされていた刑事は、他殺の線は無いように思えたが、何か心に引っかかるものがあった。

長年の経験から刑事は、桂子が何か隠していると直感した。刑事は、管理人に桂子の様子を詳しく聞くことにした。「桂子さんは、崎山さんと2時少し前に電話連絡を取っていた。2時を少し回ったところに寮にやっこられた。玄関に入ると、慌てふためいていたあなたに声をかけてきた。102号のドアをノックしても返事が無かったので、あなたが合鍵でドアを開けた。部屋の中に入ってみると二人の死体が転がっていた。そうですね」刑事は、管理人の話を簡単にまとめた。

真っ赤になった管理人は、震えながら答えた。「ハイ、おっしゃるとおりです。何度ノックしても、返事が無かったもので、合鍵で開けました」刑事は、ちょっと首をかしげ、頭をほんの少しかきむしり、訊ねた。「返事が無かったら、いつも、合鍵で部屋を開けるんですか？」びっくりした、管理人は、即座に打ち消した。「いや、あの時は、田柴さんが、ちょっと体調が悪いのを知っていましたし、それに、出かけるときには、必ず、声をかけられるんです。具合が悪くなって、田柴さんが、倒れているのではないかと不安になって、開けました」管理人は、自分は潔白だといわんばかりに必死に説明した。

刑事は、ほんの少し顔を和らげ質問した。「部屋に入った瞬間、何か、匂いありませんでしたか？香水の匂いとか？」管理人は、目を上に向けて、あの時のことを思い浮かべた。「あ、そう、確かに、化粧のような、香水のような、匂いがしたような、しなかったような。はっきり憶えていません。すみません」管理人は、頭をペコペコ下げた。刑事は、部屋の中に入った瞬間、香水の匂いをかいだ。だが、この香水の匂いは、桂子のものと同じだった。すでに、桂子は、部屋に入っていたわけだから、香水の匂いがしても不思議ではなかった。

靴跡のサイズは、崎山のサイズと同じだった。脚立の使い道は、不明だったが、他殺との関連は見出せなかった。刑事の疑問は残ったが、結局、自殺と判定された。3Dプリンタ拳銃による自殺のニュースは、大きな話題となった。しかも、自殺した二人の男性は、ゲイではなかったか？このような根も葉もないことを書く週刊誌まで現れた。さらに、第一発見者が、自殺した一人の元カノと言うことで、桂子も週刊誌で取り上げられ、一躍、桂子は世間に知られることになった。それがきっかけで、色っぽい桂子に、映画出演のオファーが舞い込んできた。桂子のビジョンは、実現した。